

被災地のスティグマを乗り越える 障害当事者が主体となった活動の可能性 —倉敷市真備町NPO法人岡山マインド「こころ」とのアクションリサーチ—

The independent-minded actions of people with disabilities in disaster-stricken communities have the potential to dissipate the stigma they face.

-Action research with Okayama Mind 「Kokoro」 a non-profit corporation in Mabi town, Kurashiki city-

石塚裕子¹

Yuko Ishizuka¹

¹東北福祉大学総合マネジメント学部・博士（工学）・E-mail: yuko-i@tfu.ac.jp

本研究は、2018年の西日本豪雨の被災地である倉敷市真備町でのアクションリサーチを通じて、復興過程における弱い市民（小さな声）である障害当事者の主体的な活動の課題と可能性を考察することを目的とした。その結果、障害当事者が主体的な活動を起こすことを阻む 要因として「被災地スティグマ」が確認された。一方で、さまざまな参加の機会は障害当事者自身 を成長させ、障害当事者主体の活動は、被災地のスティグマを乗り越える効果があり、弱い市民（小さな声）である障害当事者が地域の担い手となる可能性が確認された。弱い市民（小さな声）が安心して参加できる場には、お互いの声を聴きあうことが求められている。

In this paper, I consider the issues and prospects related to the independent minded actions of people with disabilities through an action research in Mabi town, Kurashiki city, which was affected by a flood disaster in 2018. In the results, I discovered that there is a particular stigma that arises in disaster stricken communities. However, the independent minded actions of people with disabilities have the potential to dissipate the stigma in the disaster stricken community. In addition, these people are given the opportunity to become actors within the community. Furthermore, a safe place is established to allow people with “weak voices” to participate in the community and to listen to each other’s voices

キーワード：復興、障害当事者、主体的な活動、スティグマ、小さな声

Keywords : Recovery of Disaster stricken, People with Disabilities, Independent minded Actions, Stigma, Weak voices

1. 研究の背景

近年、自然災害が頻発し、豪雨をはじめ大規模化している。災害がおこるたびに高齢者や障害者など災害時要配慮者に被害が集中し、その後の避難生活、生活再建においても社会的障壁に阻まれる人への対策が課題となっている。

これらの課題は1995年の阪神・淡路大震災から、あまり改善されていない。その要因のひとつは、避難体制などの防災を検討する場に、障害者をはじめとする「当事者」が不在であったということである¹⁾。

未曾有の災害となった2011年の東日本大震災後には、日本学術会議東日本大震災対策委員会の第三次緊急提言において「復旧・復興を通じて、男

女共同参画を踏まえ、青年の参加を促進し、子ども、高齢者、障がい者、外国人等への配慮とその参加を確保すべきである」と提言された²⁾。また、2015年3月に東日本大震災の被災地である宮城県仙台市で開催された第3回国連世界防災会議では、初めて障害に関するセッションが設けられた。そして本会議の成果文書として国連加盟国により採択された仙台防災枠組2015-2030には「災害リスクに対して、より広範で、より人間を中心とした予防的アプローチがなければならない。(中略)政府は、女性、子供と青年、障害者、貧困者、移民、先住民、ボランティア、実務担当者、高齢者等、関連するステークホルダーを、政策・計画・基準の企画立案及び実施に関与させるべきである」と記載された³⁾。実際に、福祉のまちづくりの発祥の地と言われる仙台市では復興計画の策定において障害者団体の参加があり、その後も地域防災計画の策定等において障害当事者の参加が継続的に行われている事例⁴⁾はあるしかし、すべての被災地で障害者をはじめとする多様な市民の参加が十分に行われているかと言えば否と言わざるを得ないであろう。例えば、東日本大震災の被災地における市民参加の復興まちづくりに関する研究が報告されている^{4) 5) 6)}。しかし、参加については参加人数やセクター(商店主、NPO、大学等)の多様性への言及や、一部に子どもや学生の参加に着目した研究⁷⁾はあるが、障害者や外国人など社会的マイノリティの参加について言及している研究は少ない。また、内海⁸⁾による都市計画学会における「参加」研究の分析では、参加者の少数化、固定化への課題の言及はあるが、参加する市民の多様性については言及されていない。これは、武川⁹⁾が指摘するように地域コミュニティが前提としていた住民とは、地域生活において社会的障壁を感じることなく多様な活動ができる「強い市民」を対象としており、物理的にも精神的にも社会的障壁を感じ地域生活に困難のある「弱い市民」の参加はあまり意識されてこなかったことを意味する。特に、災害研究の分野では、高齢者や障害者を支援し、配慮する対象(客体)

とした、いわゆる災害時要配慮者に関する研究は数多くある。しかし、高齢者や障害者など「弱い市民」を地域の担い手(主体)として扱い、防災や復興まちづくりへの参加や役割について言及する研究は非常に少ないのが現状である¹⁾。

一方で福祉のまちづくりやバリアフリー計画学の分野では、2000年以降、障害当事者の参加の場は飛躍的に増えている¹⁰⁾。しかし、多くの自治体では、障害者団体の長が検討会に参加することで「障害者の意見を聞いた」という手続き論として障害者の参加をとらえて¹¹⁾、実際に障害を持ちながら日々、生活する上で問題点を感じている当事者の参加は十分ではなかったとされる。また、計画時には参加の機会が提供されたが、事業段階での参加はほとんど実現せず、福祉のまちづくりの分野ですら、当事者の経験知を活かした協働のまちづくりには至っていない¹⁰⁾。さらに身体障害者を中心とした自立生活運動と併走して研究も発展してきたため、精神、知的、発達障害など「見えにくい障害」のある人への研究は遅れており、参加の方法論も未確立である¹⁰⁾。

つまり、防災や復旧、復興の場面において高齢者や障害者、外国人等の「弱い市民」の参加の必要性は認識されてはいるが、災害時要配慮者という客体としての扱いに留まり、防災や復興に参加する主体としては扱われてこなかった。そして障害当事者の参加が進む福祉のまちづくりやバリアフリー計画学の分野でさえ、主体としての参加の場面は十分ではなく、特に精神、知的、発達障害など「見えにくい障害」のある人の参加については研究も実践も十分な蓄積がない。

2. 研究の目的と方法

(1) 研究目的

本研究は、高齢者や障害者、難病者、子ども、貧困者、外国人、性的マイノリティなど「弱い市民」とされる人々の中で障害者を対象とする。特に研究も実践も遅れている「見えにくい障害」である心の病を抱える精神障害者を主対象とする。

その上で、本研究は防災、災害の研究分野において客体ではあっても、主体として扱われることの少なかった障害当事者が、被災からの復興という場面において主体として活動することの課題と可能性を考察することを目的とする。本研究のリサーチクエストは、次の2点である。

被災からの復興という場面において、

- a. 障害当事者が主体的な活動を起こすことを阻む要因とは何か。
- b. 弱い市民とされる障害当事者が主体となることの効果とは何か。

弱い市民の中でも特に社会的に偏見や差別が根深い精神障害者を主対象に¹²⁾ ¹³⁾、被災からの復興という場面において、主体的な活動を起こすことを阻む要因を実践に基づき確認し、課題を明らかにすることは、弱い市民の参加が十分に行われていない防災や復旧、復興のまちづくりに示唆を与え、社会的意義があると考え。また、福祉のまちづくりの分野においても研究が進んでいない「見えにくい障害」である精神障害者の主体的な活動の効果を明らかにし、地域の担い手としての可能性について言及することは新規性があるといえる。

(2) 研究方法

研究方法は、2018年7月に起きた西日本豪雨の被災地の一つである倉敷市真備町にあるNPO法人岡山マインド「こころ」の活動に筆者が参加、協働し、当事者（市民）と非当事者（研究者）が一緒によりよい事態をめざして取り組むアクションリサーチ¹⁴⁾を行った。NPO法人岡山マインド「こころ」の詳細は後述するが、世界的にみて精神障害者の地域移行が遅れている日本において¹⁵⁾、政策が施設から地域へと大きく舵を切った障害者自立支援法（2005年）以前の2002年から当事者主体の活動をはじめた当該法人は本研究の目的に合致した数少ない団体である。筆者は2018年7月下旬から現在に至るまで、月に平均1、2回訪問し、2021年4月現在、50回以上訪問している²⁾。本稿では主に次の2点を分析の対象とする。

a. 当事者主体の対話の場「テーブルまび」におけるNPO法人岡山マインド「こころ」のメンバー、その他の参加者の自然な会話の記録

b. 「テーブルまび」の中から生まれた「障害当事者の語り部“七夕会”」の語りと参加者との対話の記録

なお、本研究は筆者の前所属の大阪大学大学院人間科学研究科共生学系研究倫理委員会の承認（OUKS1908）を経て実施している。

上記2点の分析と考察にあたっては、スティグマという概念を補助線とする。本研究の主対象である精神障害者は「スティグマ」の影響を受けやすいからである¹³⁾。スティグマとは語源的には烙印を意味するものであり、社会学者Goffmanはスティグマを持つ者とは、否定的な社会的アイデンティティを持つ者であるとした¹⁶⁾。しかし、かつてのスティグマ研究はスティグマを持つ個人に焦点を合わせすぎていると批判され、社会条件、文化的規範、および制度的政策がスティグマを持つ人々の機会、資源、そして幸福感に与える影響、構造に着目されるようになった¹⁷⁾。近年のスティグマ研究を踏まえて、熊谷¹⁸⁾は「スティグマというのは、権力関係のもとで、一部の属性に対してラベリング、ステレオタイプ、偏見、差別が起きる現象のことである」という。そして、スティグマは三種類に分類できるとする。一つは、「公的スティグマ」であり、周囲の非当事者（家族や近隣住民、福祉関係者等）が当事者に対してもつスティグマである。二つめは、公的スティグマを自己の内面に取り込んでしまい、自己批判を行ったり、非当事者への憧れをもったりして、当事者自身もつスティグマのことである。この「自己スティグマ」は社会参加の機会や健康を奪い、症状の悪化や社会活動の減少を招くという。また自己スティグマが公的スティグマを強化してしまい、悪循環が成立しているという。そして三つめは、悪循環を維持させる法令や政策、規範などの社会構造をいい「構造的スティグマ」とする。つまりスティグマとは個人が持つものではなく、社会の側が引き起こす社会的障壁としてとらえる必

要性があるということである。この3つのステイグマ概念を援用して結果の考察を行う。

(3) 本論文の構成

3章では本研究の前提条件となるNPO法人岡山マインド「こころ」の概要と当該法人が中心となって西日本豪雨から取り組んできた活動の概要を示す。4章では、「テーブルまび」における発話内容と、障害当事者による語り部“七夕会”の結果を示す。5章ではステイグマの概念を補助線に4章の結果を考察する。そして6章において被災から復興という過程において、障害当事者が主体となった活動の課題と可能性を示す。

3. NPO法人岡山マインド「こころ」の復興への活動

(1) NPO 法人岡山マインド「こころ」とは

NPO法人岡山マインド「こころ」(以下、マインドと示す)は、精神障害の当事者が中心となって、安心して生活できる支援体制と、やさしい地域づくりを目的に2002年3月に設立された法人である。マインドは、1981年真備町に誕生した「まきび病院」のスタッフであった多田伸志氏と患者たちが立ち上げた¹⁹⁾。

まきび病院は、日本の精神病院には珍しい24時間開放型の精神科の医療法人である。まきび病院は「一人ひとりにとって『当たり前』の医療」をめざし、人間の自然治癒力を信じ、当事者、当事者の家族、当事者を支える人々、医療従事者がチームとなって当事者の尊厳を大切にする医療を行っている²⁰⁾。その精神に学んだ多田氏を中心となって、退院可能な患者が地域で安心して暮らせる住まい、支援体制を確保するために、患者たちと立ち上げたのがマインドであった。障害者自立支援法(2005年)により、ようやく日本の精神医療、福祉が施設から地域へと大きな変化を起こしはじめた時期と重なっている。マインドは、障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律による障害福祉サービスならびに地域生活支

援事業に基づき、ケアホーム、グループホーム、作業所を運営している。また、精神障害に係る相談事業(「テーブルまび」等)、住民との交流事業(「地ビールと音楽の夕べ」等)、研修・啓発活動(講演会等)を実施している。さらに、障害者自立支援に係る事業として、独自に地ビール醸造・販売を行ってきた。職員(スタッフ)として勤務する障害当事者(メンバー)もいる。

(2) 主な活動内容

グループホームは独立した大規模な建物ではなく、普通の民家や一般のアパートの一室を借りている。そして、地域の溝掃除をしたり、公民館脇の花壇の花植えを行ったり、地元の祭りに出店するなど地域との交流活動を重ねながら、精神障害者が地域に共に暮らし、地域の一員となり、担い手となることをめざして活動してきた。

「テーブルまび」とは、マインドが2007年4月から毎月第二日曜日に開催してきた集まりであり、障害当事者が中心となった対話の場である。「テーブルまび」では自己紹介・近況報告から始め、参加した各人が自由に発言し、何を話してもよい。ただし約束事が2つある。一つは、「他者を誹謗中傷したり、おとしめることはしない」。二つ目は、「人の意見はきちんと聞く」である。この約束事を守りセーフティな場で、あえてテーマを決めずにその時々自由なテーマで対話が展開されてきた。例えば「障害とは何か」、「指導と支援の違い」、「障害者の就労」、「幻聴、幻覚との付き合い方」などである。参加者は精神障害当事者のほかに、福祉関係者、行政関係者、そして近隣の住民など、誰でも参加できるオープンな対話の場であることが大きな特徴である²¹⁾。

(3) 被災状況

2018年7月に起きた西日本豪雨災害は全国で死者224名、行方不明者8名と甚大な被害をもたらした。真備町では7月6日に町内を東西に流れる小田川が計画水位を超過し、小田川と支流の堤防が合計13か所で損壊、決壊したことにより、可

住地の大部分（面積約1200ha）が浸水する大惨事となった。真備町で亡くなった51人の内、45人（約88%）は65歳以上の高齢者であり、65歳以下の死亡者6名の内、2名（親子）は知的障害者・児であった。また、取材記録から個人属性が把握された32名の内、約6割の人は何らかの障害があったことが確認されている²²⁾。

そしてマインドの作業所やグループホームも被災した。精神障害の当事者であるマインドのメンバー（以下、マインドのメンバーとする）20人の住まいは、10人が全壊、7人が一部損壊となり、事業所も1か所は全壊、もう1か所は一部損壊の被害を受けた。メンバーたちは逃げ遅れも生じたが全員が無事であった。しかし一般避難所には、避難できないと多田氏が判断し、まきび病院へ緊急避難を余儀なくされた。メンバーにとっては通い慣れた病院ではあったが、地域での暮らしに早く戻りたいとマインドのメンバーから多田氏に申し出があり、居住環境が十分には整っていない中、2018年8月1日付で、全壊を免れたグループホームに集住する形で元の地域に戻った。真備町では全壊家屋が8割を占め、被災者の8割は、町外のみなし仮設住宅でバラバラに避難生活を送っており、町は昼間でも人はまばらで、夜は明かりが灯らず暗闇であった。

（4）マインドが関わった復興への活動

真備町では医療・福祉に関わる関係者による真備地区関係機関・事業所等連絡会⁽³⁾（以下、真備連絡会と示す）が2015年に結成され、隔月で会議を開催していた。町内の医療・福祉事業所の多くは被災したが、災害直後の2018年9月3日に連絡会を再開し、高齢者や障害者などの状況を確認しあった。そして、真備連絡会として「小さな声」の人たち、つまり「弱い市民」（以下、小さな声の人たちとする。）の声を反映した復興に取り組み、やさしいまちをつくらうという声があがった。真備町では前述のとおり51名もの尊い命が失われ、その多くは高齢者や障害者という小さな声の人たちであった²²⁾。連絡会に参加する福祉

事業所では利用者を亡くしたところもあり、同じ悲劇を繰り返さないために、誰ひとり取り残さないまちづくりが目標となった。そのような中、マインドのメンバーはさまざまな活動を始めたり、関わるようになった（表1）。マインドのメンバーが特に主体的に関わったのは、「被災地交流会（まちコン）」、「被災者のリレーインタビュー」そして「障害当事者の語り部“七夕会”」である。

最初に取り組んだ「まちコン」について以下に詳述する。マインドの企画・運営会議である作業所当事者会（毎週火曜日に開催）が2018年8月14日に開かれ、多田氏の発案で災害前に毎年、地元のみちづくり推進協議会や真備連絡会と一緒に開催していた「地ビールと音楽の夕べ」を被災者の交流会として8月25日に開催することを方針決定した。当日は300名を超える人々が集まり、災害後の苦労を語り合う姿が、あちらこちらで見られた。この交流事業は毎月第三土曜日に開催されることになり2019年12月まで続いた。マインドのメンバーは、子どもの遊び場コーナーを担当したり、当該法人が製造する地ビールの販売などを行った。10月には7月には実施できなかった七夕の短冊に復興の願いを書くコーナーを設置し、住民の声を聴く場をマインドのメンバーが設けた。

その担当をしていた一人が「これまで〇〇さんとは挨拶はしていたけれど、しっかり話をしたこ

表1 マインドが関わった復興への活動

	取り組み内容	実施時期
1	被災者交流会「まちコン」の開催 (主体：マインド、真備連絡会)	2018.08～ 2019.12
2	被災者アンケート調査 (主体：真備連絡会)	2018.10～ 2018.11
3	復興ビジョンの提案 (主体：真備連絡会)	2018.12
4	お互いさま復興を考える会（勉強会） の開催（主体：お互いさまセンター）	2018.10～ 2019.03
5	被災者のリレーインタビュー (主体：マインド、筆者)	2018.11～ 2019.12
6	障害当事者による語り部“七夕会” (主体：マインド、テーブルまび参加者、筆者)	2019.12～

とはなかった。〇〇さんが話しかけてくれて嬉しかった」と語った(2018.10.14)。障害当事者が主催者側に立つことで、地域住民との関係性が変わる可能性を筆者は感じた。そして毎回、テントや机、椅子などの設営をマインドのメンバーが中心になって行う様子に筆者はまちづくりの新たな担い手の存在を認識した。

4. 結果

(1) 「テーブルまび」に筆者が参加した経緯

災害から1年が過ぎて、復興事業が進みはじめ、災害公営住宅の建設、復興公園の整備など、具体的なプロジェクトが動きだし、行政から復興事業への住民参加の働きかけが活発になった。また各地区では次の災害に備えて防災活動が盛んになってきた。しかし、活動が盛んになればなるほど、その場に小さな声の人たちの姿は見られなくなり、「強い市民」によるまちづくりが推進されていた。そこで筆者はマインドのメンバーを中心に障害当事者主体の復興、防災をテーマとした研究会を設置することをマインドのメンバーに提案した。しかし、2019年5月28日の作業所当事者会で提案したところ、災害から1年が経過し体調を崩す人が増える中で、前向きに反応する者は少なかった。マインドのスタッフ(健常者)から「市役所から事業所の防災計画を提出するように言われているから一緒に考えていけば」と提案もあったが「話を聞くのもしんどい人がいるから」と断られることになった。そこで、マインドの活動に筆者が介入するのではなく、傍にいて、彼らが災害の経験、今後の防災についてどのように考えているのか見出していくこととなった。一緒に時間を過ごすなかで、小さな声の人たちが主体的な活動を起こせない要因である「被災地ステイグマ」を確認することになった。

(2) 「テーブルまび」における災害に関する対話

マインドは災害により休止していた「テーブルまび」を2019年8月から再開させた。筆者は防災

表2 「テーブルまび」の参加状況

参加者	9/8	10/13	11/10	12/8
A氏(発達障害・精神障害) 30代・男性	○		○	
B氏(精神障害) 50代・男性	○	○	○	○
C氏(精神障害) 40代・男性	○	○	○	○
D氏(精神障害) 50代・女性	○		○	○
E氏(精神障害) 40代・男性		○		○
F氏(精神障害) 40代・男性		○		
G氏(精神障害) 50代・男性		○		
H氏(肢体不自由) 50代・女性	○	○		○
I氏(元福祉事業所職員) 50代・女性	○			○
J氏(元福祉事業所職員) 60代・男性	○			○
L氏(マインドスタッフ) 60代・女性	○	○	○	○
M氏(マインド代表) 60代・男性	○	○		○
N氏(福祉事業所職員) 40代・女性	○		○	
参加者数	10	8	6	9

をテーマとした研究会を立ち上げる代わりに、「テーブルまび」に参加することにした。2019年9月～12月の計4回の「テーブルまび」における対話を分析対象とする。参加者は表2に示すとおり、参加人数は会ごとに変化するが障害当事者は8名、その他スタッフ等は5名である。障害当事者の発話内容を表3に整理した。

「テーブルまび」では、あえてテーマを決めずにその時々自由なテーマで対話が展開されるため、その話題は家族のこと、就労のこと、障害のことなど様々であったが、災害に関して話す頻度は高く、全発話数の約半数を占めた。災害後の環境変化が影響して体調を崩し入院をしたE氏は「みんなが復興に向けて頑張ろうとしている中で、自分はしんどくて何もできない」と話し、G氏は「災害後の片付けを手伝わないようにと家族から言われた」と語った。参加者は、災害を経験し復興にも関心はあるが、その気持ちと自身の行動のギャップを吐露することが多かった。そのような中、H氏が真備町の復興について「私は地域の役に立っていないと感じる。使ってもらえない寂しさを感じる」、「私たち障害者の存在が忘れられているのではないか」と発言した。この言葉を受けて、被災者のリレーインタビューに参加していたC氏が「復興にむけてまちづくりに参加したいと思ってた」と応答した。これがきっかけとなり、被災

表3 「テーブルまび」で話されたテーマと発話内容

テーマ	発話内容	スティグマ			発話者	発話日
		公的	自己	構造		
災害	災害があり不安な部分もあったが、災害後、地域の人達との関係が密になった。あいさつ程度だった人が、車に乗せてくれたり、話しかけてくれたりする機会があった。				C氏	9/8
	人と出会うことが楽しくなった。災害後にいろんな出会いがあって変わってきている。				C氏	9/8
	友人に相談して3日間ホテルで過ごし、マンスリーマンションに移動して3週間後に戻ってきた。家に戻って、夜食を食べる癖がついてしまっている。時間がズれている。				A氏	9/8
	避難所に個室が欲しいと思う。テントを買おうと思っている。外国人の人やひきこもりの人はどうするのか。				A氏	9/8
	復興の中で私たち障害者の存在が忘れられているのではないかな。	○			H氏	9/8
	真備の水害では「逃げ遅れ」が多数、生じたと報道があった。でも自分は逃げたかったけど、逃げる先がなかったのであって逃げ遅れたわけではない。家族が避難しない中で、一人では避難所に行っても困るだけだと思ひ避難を躊躇した。				H氏	9/8
	まきび病院に避難したが、はやく帰りたかった。Mさんが来てくれて嬉しかった。				D氏	9/8
	僕たちは避難所に避難していない。避難所に行かずに済んで、あまり大変な思いをしていない。	○	○		B氏	9/8
	社会の一員でありたい。排除されていると感じる。(復興の場面で) 私たちみたいなものを使ってくれたら。役にたっていないと感じ、使ってもらえない寂しさ。	○		○	H氏	9/8
	復興に向けてまちづくりに「参加したい」と僕も思っていて。H氏さんと普段から交流して、精神の病の経験があるので気持ちはわかる。			○	C氏	9/8
	昨年の災害から1年半、目まぐるしく状況がかわり、環境の変化についていけなく、とても調子が悪い。最近、引っ越しをしてたくさんお金を使い、作業所も新しくなり、あまりの環境の変化にとでもついていけないので、作業所をしばらく休みたい。			○	E氏	10/13
	災害後の片づけを手伝わないように言われた。それは思いやりから。私がいっぱいいっぱいになることがわかってきたから。	○	○		G氏	10/13
	みんなが復興に向けて頑張ろうとしている中で、自分はしんどくて何もできない。			○	E氏	10/13
	ボランティアのみなさんが暑中、泥かきをしてくれていたのに、僕は手伝うことができなかった。			○	C氏	11/10
	真備に帰ってこれた人を見ると「うらやましい」。そう思っている自分が惨めである。			○	H氏	12/8
	人と出会うことが楽しくなった。災害後にいろんな出会いがあって変わってきている。				C氏	12/8
人の復興は、心の復興ではないかと最近思うようになった。				C氏	12/8	
社会参加	作業所で「役割」があること。与えられたものではなく自分でつくった役割があること。作業所のような基盤が必要。			○	G氏	10/13
こんなことをしている場合ではないと思う反面、引きこもってしまうから、今日も参加した。				H氏	12/8	
家族	実家がなくなった。懐かしい。				B氏	10/13
家族の理解が必要。長い間、道楽息子と思われていた。針の筵の上にいるようだった。近所の人にも悪口を言われた。精神障害とわかり、父親が「あーあ息子は病気だったんだ」といったことが印象に残っている。42歳で作業所に通うようになり、それから家族との関係が円滑になった。	○			G氏	10/13	
GWと盆と正月に実家に帰っている。母親は生き生き体操に参加して元気になっている。物理的に離れているほうがよいようだ。こっち(真備)に住んでいることで安心してくれている。				E氏	10/13	
親父には働けない自分は、怠けていると思われていた。そんな親父でもいなくなると寂しい。	○			B氏	12/8	
数ヶ月前に主人を交通事故で亡くした。何もかも一人でやらないといけなくなり、とても大変である。経済的にも苦しい。				H氏	12/8	
就労	親は脳性まひであったが、働いていた。障害があってもなぜ働かないといけないのか。	○			B氏	9/8
9月いっぱい派遣で働いた。パチンコ依存症がぬけてきた。				F氏	10/13	
親は、僕がいつになったら独立してくれるんだろうと思っていた。障害者は働かないといけないのか?	○			B氏	10/13	
最近週2回キコ園で力仕事をしている。				B氏	11/10	
俺は障害者年金で生活しているから、一般の人がどう見ているのか。	○	○		B氏	11/10	
健常者と同じように一般就労したいと頑張ってしまう人がいるが、仕事に対する思いが日本人には強い。	○			B氏	11/10	
(語りべ会の話題になって) 発達障害に関する講演会や当事者会をしていたが、今はやっていない。僕は口先だけという自己嫌悪感を持っている。他の当事者は大学に行き、就労し、説得力があるが、自分は大学に行っていないし、就労経験もなく、そんなの説得力がない。			○	A氏	11/10	
障害	精神病院に40年以上入院している人がいる。マインドにきたXさんは25年、Zさんは35年、入院していた。病院から外の世界へ出るのには勇気がある。バスや電車の乗り方も変わってしまっている。			○	B氏	11/10
自殺願望があったときは、警察の人に話を聞いてもらった。				B氏	11/10	
精神障害は脳の病気と言うが、心の病気でもあると思う。当時は精神の病を恥ずかしいと思っていたが、今は恥ずかしくない。			○	B氏	11/10	
発達障害は生まれつきで精神障害とは異なる。ハイセンスティブパーソンと呼ばれ、親からも虐待をうけた。社会の中で自分に合うものがほとんどない。無理して社会に合わせようと生きてきたので、自分の本音をだせない。だす回路を持っていない。我慢するクセがついている。そのために中2で働けなくなり、学校にも行けなくなってしまった。	○	○		A氏	11/10	

した障害当事者を中心に語り部の会をつくろうという機運が盛り上がった。

(3) 障害当事者による語り部“七夕会”

マインドでは精神障害への理解を促す講演に取り組んできた経験がある。このため、「テーブルまび」で生まれた語り部“七夕会”（以下、語り部と記す）への参加を筆者がマインドのメンバーに呼びかけた（2019.11.10）。「避難所に行かずに済んで、あまり大変な思いをしていない」とか「ボランティアが暑い中、泥かきをしてくれていたのに、僕は手伝うことができなかった」など、被災の程度やその後の自分たちの行動に後ろめたさを感じているような発言をしていたマインドのメンバーの多くは、被災経験や復興への想いを語ることに躊躇した。その中で唯一、C氏が参加を表明し、車いすユーザーのH氏と2名で活動をスタートさせた。はじめはお互いの被災経験を共有することからはじめ、何を伝えたいのかを筆者と一緒に考えた。そしてマインドが立地する箭田地区のまちづくり協議会⁽⁴⁾の防災研修会で話す機会を得ることができた（2019.12.20）。以下に2人の語りと参加者との対話を示す。H氏は、被災当日、雨の降り方に異常を感じて避難をする必要性を感じたが、同居する家族が同意しなかった。1人で避難所に行っても困るだけだと思い避難を躊躇し、逃げ遅れた経験を話した。しかし自分は逃げ遅れたのではなく、逃げられる場所がなかったのだと伝えた。また最近、家族を事故で亡くし、生活再建も見通しがつかない中で、今回の語り部の活動が心の支えとなり、「役に立っている。私のことを必要としているということが嬉しい（2019.12.20）」と語った。

C氏は25歳の時に統合失調症とうつ病を患ったことから話はじめ、災害当日は、安定剤を飲んで眠ってしまっていたので浸水が始まっていたことに気が付かなかったと被災経験を語った。その後、病院に避難したけれど、早くまちに帰りたいと思ったこと、被災後にまちの人から声をかけてもらって嬉しかったことなどを話した。そして「僕

たちは、泥かきをしていないことを気にしている」と伝え、まちの復興に向けて何かしたいと想う気持ちと体調とのバランスがとれないもどかしさについてマインドのメンバーを代表して語った。最後に「精神障害を隠さず、安心してカミングアウトできるこの町の人たちに感謝している」と締めくくった。

この会では参加者との対話を積極的に試みた。第一声に「実は、私は被災してなくて。娘の家は全壊だったけど、私の家は無事だった。なので、このような会に出席することを躊躇していた」と福祉ボランティアをしている女性が語った。また、「災害当時を思い出して心が震えた。私の友人は今も怖さから立ち直れていない」と涙ながらに話す人もいた。協議会役員の人には「マインドのみなさんがいてくれることが、我が協議会の目標である『あったかまちづくり』を体現している」と感想をのべた。

5. 考察

4章の結果から本研究の2つの問いに対する考察を述べる。

(1) 被災からの復興という場面において、障害当事者が主体的な活動を起こすことを阻む要因—「被災地のスティグマ」

表3では「テーブルまび」の発話内容の中でスティグマを示しているものには下線を引き、3つのスティグマ（公的、自己、構造的）との関係を示している。マインドのメンバーの多くは精神障害の一つである統合失調症を患っている人が多い。統合失調症は10代後半から30代に発症することが多く、就学時や就労を始める時期と重なるため、家族や近隣者から公的スティグマを受けやすい。「テーブルまび」においても、G氏が「長い間、道楽息子と思われていた。針の筵の上にいるようだった」と語り、B氏は「親は僕がいつになったら独立してくれるんだろうと思っていた」など、家族からの抑圧や働くことへの負担について発話

されることが多かった。この傾向は、被災という緊急事態においても同様である。B氏は「(支援者が避難所には避難できないと判断して) 僕たちは避難所に避難していない」とか、G氏は「(家族から) 災害後の片づけを手伝わないように言われた」などの発話から公的スティグマを確認できる。このような家族や支援者等から認めてもらえないなどの公的スティグマを受けると、自己批判が生じやすくなる。例えばE氏は「みんなが復興に向けて頑張ろうとしている中で、自分はしんどくて何もできない」と言い、C氏は「ボランティアのみなさんが暑期中、泥かきをしてくれていたのに、僕は手伝うことができなかった」と自己スティグマが吐露された。そして、マインドの精神障害への理解を促す講演に最初に取り組んだ当事者であるA氏は、語り部への参加に最初は意欲を示していたが「(自分の経験では) 説得力がない」と感じて参加を断念した。このように平時からスティグマを受けている障害当事者は、災害時の混乱期、復興期においてはより強くスティグマを感じる中で、主体的な活動を起こすことは容易でないことが理解できる。そして、復興に向けて被災地の中で頑張る「強い市民」の様子から、小さな声の人(弱い市民)である障害当事者はより強く自己スティグマを感じていることが確認された。

さらに復興に向けて様々は事業や活動が展開されるなかで、H氏が「復興の中で私たち障害者の存在が忘れられているのではないか」、「社会の一員でありたい。排除されている。(復興の場面で) 私たちみたいなものを使ってください」、「役にたっていないと感じ、使ってもらえない寂しさ」と吐露したように、参加できない、声をかけてもらえないなどの構造的スティグマが、障害当事者たちを疎外し孤立させていた。被災から復興という場面では、平時以上に公的スティグマが生じやすく、障害当事者は自己スティグマを感じやすくなる傾向にあり、障害当事者などマイノリティが社会参加できる場面が少なくなるなどの構造的スティグマがそれを強化してしまっている。これは小さな声の障害当事者が、主体的な活動を起こす

ことを阻む要因であり、「被災地のスティグマ」と称したい。

(2) 弱い市民とされる障害当事者が主体となることの効果

前述のH氏の「社会の一員でありたい。(復興の場面で) 私たちみたいなものを使ってください」という言葉に触発されて、C氏が「復興に向けてまちづくりに『参加したい』」と思っていて。精神の病の経験があるので(H氏さんの) 気持ちはわかる」と共感し、障害当事者が主体となった語り部の活動が始まった。語り部は、多様な障害当事者が互いの価値、知識、技術を提供しあい、更新しあうことで連帯していくこと障害横断(cross-disability)の組織と言える。そして、語り部による対話の場は、障害当事者だけでなく健常者とも連帯する場となり、健常者が抱える「被災地のスティグマ」を表出する端緒となった。

被災経験による中心-周辺構造がさまざまな分断を生じさせるとされ、被災者の複雑性や境界の曖昧さが指摘されている^{23) 24)}。防災研修会の参加者から発せられた「私は被災していない。なので、このような会に出席することを躊躇していた」という語りは、宮地のいう当事者の「被災や喪失の程度の『重さ比べ』」²⁵⁾から生じた言葉であり、非被災者というラベリングにより、復興の場に参加できない、参加しにくいという、復興という場面から疎外感を感じる周辺化された被災者へのスティグマの存在を示している。また、別の参加者は「私の友人は今も(被災経験の) 怖さから立ち直れていない」といった弱さを代弁する場面もあった。

このような事象は、向谷地のいう「弱さの情報公開」²⁶⁾の場であり、鷺田のいう「弱さの力」²⁷⁾であろう。弱い市民とされる障害当事者が主体となった活動が、非被災者というラベリングで隠れていた小さな声の市民が声を出すきっかけとなったり、防災や復興といった話題の中で表出しづらい弱さについて語られたりした。これは小さな声の弱さを抱えた障害当事者が主体となることの効

果の一つといえるだろう。そして、語り部を実施してわかったことは、「お互いの声」を聞きあうことが大切であるということである。「お互いの声」を聞きあうことがきっかけで、支援者、非支援者、被災者、非被災者、障害者、非障害者といった関係性を越えて、お互いに尊重しあう新たな関係性が生まれる。これは近年、精神医療の分野で注目されているオープンダイアログという実践システムに通ずる。オープンダイアログでは、対話によって「消し去られる感情」ではなく、対話によって「生み出される感情」に光を当て、「当事者だけの感情」ではなく「専門家にも共有される感情」を重要視し、「感情の共同化」という方法をとるという²⁸⁾。小さな声の人の語りから始まった「お互いに声」を聴き合う場は、感情の共同化が行われたと言える。

そして、障害当事者自身の変化も確認された。被災者交流会の「まちコン」の準備を毎回担い、筆者と一緒に被災者のリレーインタビューをしてきたC氏は、災害後の講演会において「インタビューをして（被災者の）『真備に帰ってきてほしい』、『真備に帰りたい』という声を聞いていく中で、障害があろうが、高齢であらうが、子どもであっても、自分たちの力でまちを復興できると思えるようになってきて、まちづくりへの希望が自分を支えてくれているように思う」と語った(2019.01.25)²⁹⁾。そして、「テーブルまび」においても「人と出会うことが楽しくなった。災害後にいろんな出会いがあって変わってきている」、「人の復興は心の復興ではないか」といった意見を発し、語り部の活動をはじめた。語り部の場には、語るという行動を自らはまだ起こせてはいないマインドのメンバーの姿があり、C氏は「僕たちは、泥かきをしていないことを気にしている」とマインドのメンバーの気持ちを代表して聴衆に伝えた。その後の対話の中で健常者もつ弱さが表出され互いに理解、共感する場が生まれた。

これまで「当事者の声」を聞くことが大切であるとされ、実践においても、研究においても「当事者の声」を聞くことが熱心に行われてきた。し

かし、そこには聞く側の目的があり、その目的への期待を織り込んで発せられる「当事者の声」は、その場に働く力の産物でしかなかったといえる¹¹⁾。また、障害当事者を、まちを利用するエンドユーザーとしてのみ扱い、サービスを受ける者としての参加であった。しかし、まちづくりは「地域における、市民による、自律的継続的な、環境改善運動」³⁰⁾であるならば、小さな声の弱い市民は、まちの利用者であるとともに担い手でもあるべきである。小さな声の人たちが主体となって語り部をすることで「お互いの声」を聴きあう場となった防災研修会は、被災地のスティグマを乗り越えるきっかけとなり、小さな声の人である障害当事者の一つの役割を体現した。そしてC氏のように参加の経験を積み重ねることで、小さな声の人たちがまちづくりの担い手となる可能性を示した。

6. 結論

本研究では、被災からの復興という、まちづくりが大きく動く場面において、弱い市民（小さな声の人）である精神障害者とのアクションリサーチを行った。その結果、弱い市民（小さな声の人）が主体的な活動を起こせない要因として「被災地のスティグマ」の存在が確認された。平時からスティグマを感じやすい小さな声の人たちは、災害後の様々な環境変化の中で、要配慮者として扱われることで公的スティグマを感じやすくなり、それが自己スティグマを生じさせる。そして、弱い市民の参加の必要性は認識されていても現時点では十分でないという構造的スティグマが、さらにそれらを固定化し、強化してしまう傾向が確認された。これを本研究では「被災地のスティグマ」と称し、弱い市民（小さな声の人）が主体的な活動を起こせない要因の一つであるとした。また、「被災地のスティグマ」は障害当事者だけに生じるのではなく、非被災者というラベリングされた健常者にも生じていることが確認された。復興の場面に非被災者が参加していない、できない

課題は他研究でも指摘されており²³⁾ ²⁴⁾、「被災地のスティグマ」が引き起こす課題といえるだろう。

一方で、語り部のような、小さな声の人たちが主体となった場合は、「弱さ」を表出しやすくなり、属性を超えて感情を共有し、共同化する場となる。このような場は「被災地のスティグマ」を乗り越える効果を秘めている。そして、多様な人々が参加できる、参加しようと思うセーフティな場を創り出す可能性が確認された。そして、さまざまな取り組みに参加した精神障害者C氏のように、参加の機会が増えることにより、地域の担い手として成長する小さな声の存在も確認された。

本研究は弱い市民（小さな声の人）の一部である精神障害を主とした障害当事者が主体となった活動の可能性の一端を示したに過ぎない。引き続き、貧困者や外国人、性的マイノリティなど弱い市民とされる小さな声の人たちが、住んでいる地域で声をだすこと、伝える場を持つこと、安心してお互いの声を聴き合えるセーフティな対話の場の可能性を検証し、「被災地のスティグマ」が生じないようなまちづくりを実現することが今後の課題である。

<謝辞>

本研究の遂行にあたっては、NPO法人岡山マインド「こころ」の多田伸志氏、矢吹謙孝氏から多大なご協力、貴重なアドバイスをいただきました。またマインドのメンバーをはじめ真備連絡会、真備町民のみなさまのご理解、ご協力をいただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

なお、本研究は公益財団法人交通エコロジー・モビリティ財団バリアフリー研究・活動助成ならびに科学研究費（課題番号：20K20776, 22K18554）を受けて実施しました。心より感謝申し上げます。

【補注】

(1) 一般社団法人日本福祉のまちづくり学会が開催した「災害と福祉のまちづくり連続セミナー（第1回）」（2021年3月7日）における東北

福祉大学阿部一彦氏の講演内容に基づく。

- (2) 筆者は、2018年7月に倉敷市の災害ボランティアセンターでの電話受付から活動をスタートさせた。筆者は復旧から復興過程において長期的に障害者など声の届きにくい人々を支援する体制をつくる必要があるのではないかと考え、地元住民で中心となって取り組めるような人物を探したところ出会ったのが、マインド代表の多田伸志氏とそのメンバーである。
- (3) 真備連絡会（真備地区関係機関事業所等連絡会）とは、地域自立支援協議会の下部組織として位置づけられた任意の連絡組織。2015年から活動している。高齢者、障害者、児童等に関わる福祉事業者、医療関係者、約20団体で構成される。
- (4) 箭田地区まちづくり協議会とは、真備町内7地区にそれぞれに設置された協議会である。連合自治会のような存在である。

参考文献

- 1) 石塚裕子 災害と障害 インクルーシブ防災を実現するための視座, 福祉のまちづくり研究 vol.21No.3, pp.1-12, 2019
- 2) 日本学術会議東日本大震災対策委員会：東日本大震災に対応する第三次緊急提言, <http://www.scj.go.jp/ja/info/jishin/pdf/t-110405-1.pdf>, 2021.04.25 最終閲覧, 2011
- 3) 外務省：仙台防災枠組み 2015-2030 (仮訳), <https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000081166.pdf>, 2021.04.25 最終閲覧
- 4) 渡部 美香・福島 秀哉：岩手県上閉伊郡大槌町町方地区の復興計画策定過程における住民参加型議論の役割－各事業段階における計画主体の議論のマネジメントと行政の計画反映判断の特徴に着目して 都市計画論文集 53 巻3号 pp. 799-806, 2018
- 5) 松本 暢子・加藤 仁美・小川 美由紀：東日本大震災における復興まちづくりのプロセスに関する考察－福島県いわき市豊間地区

- のふるさと復興協議会の活動とその支援，都市計画論文集48巻3号，pp.699-704，2013
- 6) 荻谷 智大・姥浦 道生：震災復興初動期における住民主導型まちづくりの発動プロセスに関する一考察－宮城県石巻市中心市街地を事例として，都市計画論文集48巻3号，pp. 837-842，2013
- 7) 三宅 諭・大瀧 英知：岩手県野田村の復興まちづくりにおける小中高参加による都市公園事業の総括 都市計画論文集，53巻3号，pp.445-452，2018
- 8) 内海 麻利 都市計画における「参加」の諸相－都市計画学会学術研究論文を素材として－，自治体学 Vol.30-2，pp.43-50，2017
- 9) 武川正吾：地域福祉の主流化，pp.60-66，法律文化社、2006
- 10) 石塚裕子：バリアフリー計画学の到達点と新たな射程，土木計画学論文集 D3（土木計画学）78巻6号，pp.315-326，2022
- 11) 星加良司：当事者をめぐる揺らぎ－「当事者主権」を再考する，支援 Vol.2，pp.10-28，生活書院，2012
- 12) 内閣府ウェブサイト：平成18年度障害者の社会参加促進等に関する国際比較調査，<https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/tyosa/hikaku/gaiyou.html>，2023.01.04 最終閲覧
- 13) 吉井初美：精神障害者に関するスティグマ要因－先行研究をひもといて－，日本精神保健看護学会誌18巻1号，pp. 140-146，2009
- 14) 矢守克也：アクションリサーチ 実践する人間科学，pp.11-25，新曜社，2010
- 15) 大塚淳子：精神障害者の地域移行支援の現状と課題，社会福祉学第50巻第3号，pp.87-91，2009
- 16) アーヴィング・ゴッフマン著・石黒毅訳：スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ（改訂版），せりか書房，2001
- 17) Mark L. Hatzenbuehler Structural Stigma: Research Evidence and Implications for Psychological Science, American Psychologist No. 71 (8) pp.742-751, 2016
- 18) 熊谷晋一郎：当事者研究 等身大〈わたし〉の発見と回復，pp.180-185，岩波書店，2020
- 19) NPO 法人 岡山マインド「こころ」ウェブサイト
<http://mindkokoro.web.fc2.com/index.html>，2021.04.25 最終閲覧
- 20) まきび病院ウェブサイト
<http://www.makibi.or.jp/> 2021.04.25 最終閲覧
- 21) 倉敷地域自立支援協議会ウェブサイト
<http://www.kurashiki.j.com/>，2021.04.25 最終閲覧
- 22) 石塚裕子・東俊裕：避難行動要支援者の実態と課題－2018年西日本豪雨 倉敷市真備町の事例から－ 福祉のまちづくり研究23巻，pp.15-24，2020
- 23) 関嘉寛：東日本大震災における復興とボランティア中心－周辺の分断から考える－，フォーラム現代社会学15巻，pp.92-105，2016
- 24) 山崎真帆：復興過程における「被災者」の自己認識に関する一考察－仮設住宅居住者と非津波被災者の語りに基づく「被災者」の構造と輪郭の分析から－，日本災害復興学会論文集16巻，pp.24-36，2020
- 25) 宮地尚子：震災トラウマと復興ストレス，pp.14-25 岩波書店，2011
- 26) 向谷地生良・浦河べてるの家：新安心して絶望できる人生「当事者研究」という世界，pp.24-45，一麦出版社，2018
- 27) 鷺田清一：〈弱さ〉のちから，pp.173-221，講談社，2001
- 28) 野口裕二：ナラティブと共同性，pp.135-155，青土社，2018
- 29) 石塚裕子：まちづくりとインクルージョン－『小さな声』による復興まちづくりを通じて，未来共創7号，pp.83-98，2020
- 30) 小林郁雄：『都市計画とは』『まちづくりとは』何か？，都市計画とまちづくりがわかる本，pp.8-14，彰国社，2011